



ピクタインダカン

(おきみがりにぼし)

第 35 号

発行日 2022年4月10日

発行人 矢代 しず

秋田市御野塩7-1-29-305

垂氷のかんざし

大寒の朝

空の鏡はどんよりと曇り

凍てつく道路に

時折 車を通る音

昼下がり

張りつめた空から

群れて舞う白蝶のような雪が

ふうわりひらり 降り積もる

冷えこむ夜

無尽の雪は瞑想しながら

白布で地上を覆っていく

縮こまって眠る松の老木には

鈍い光をはなつ垂氷たるひのかんざし

銀の髪が濡れている

海との距離

日本海より 6.4 K

お喋りな町からはなれた堤の緑地

思うまま繁茂する雑草の

むこうから 水の匂い

日本海より 6.8 K

空のふかさを知る寡黙な風車

のびやかに飛びひかう赤トンボの群れ

豊穡を描いた向日葵色の田んぼ

日本海より 7.2 K

空には魚が泳いでいる

ふいに風が変わり

潤いをもった風の

やさしい鋭さに露草がゆれる

日本海より 7.8 K

鈴虫がさやかに秋を歌っている

光がこぼれる草藪の先は

豊かに流れる雄物川

連なる三角のさざ波が輝いて

日本海より 8.0 K

平らかな川面に影をおとす

灌木の濃緑と橋脚の黒

ふと清浄な水鏡をみると

銀色の光が反射して

わたしのなかへ

つめたい風から守ってくれた

むかしと変わらぬ光の風景や

水のしなやかな強さに惹きつけられる

日が翳ってきた

負の記憶へとつながる道を折り返す

日本海まで
8.0
K



回廊

白いしろい雪の回廊をめぐり
さびしくたたずむ橋のたもとで

無言で瞳をこらす日暮れ

川は水の記憶をなぞるように

静謐のなかを流れていく

水面にうかぶ波の音符

優美な白鳥の羽ばたき

遠くに光る黄いろな灯

突然 空は

灰色の薄絹を次々と重ね

鼠色の昏い表情に変わった

アルミ色の風が

激しく川に吹きつける

水底までしみわたるつめたさで

白くもえる空から

一塊の雪が

風に吹かれて降りてきても

雪は水の細い影に吸われるように

溶けながら消えてゆく

透きとおった水の

清冽さに惹かれたのは

いつのころからだっただろうか

飽きずに眺めた川の

まるい水おと

川の底で夢みる小石の

ちいさな眼

白いしろい冬の

日暮れ

橋のたもとにたたずんで

徒然のエチュード 32

①

わたしはひたむきに詩の道歩みたい
だが 脆く

友人の 魅力あることば
や

お菓子の 甘ったるい声
そして

午睡の しつこい誘い
を

拒むことができない

七十一にしても

まだ

惑っている

もう一度

四十に戻って
やり直した!!

②

県南で産湯を使い

姓は矢代

名はレイ

人呼んで

“五黄の寅”

と発します

本年は縁起もよろしく

果たして

寅は

強運をつかめるだろうか……? ?

③

しばれる朝

ゴミ出しに行く

道路には

タイヤの跡

や

靴跡

が

固まって

氷の

オブジェのよう

強風にあおられ

体がよろけ

ゴミ袋がゆれる

小屋の横に

鴉が一羽

じっと立ちつくしている

おもむろに

かじかんだ声で

ガア〜 サンビ〜

明日の朝

黒い足形模様が見られるかも？

④

病名はなんですか？

いえん

病名は？

いえん

えっ？

さっきから言ってるでしょう！

いえん（胃炎）

⑤
なにがしあはせかわからないです。

〈宮沢賢治〉

わたしを
わたしたらしめるものは何か

詩

詩を書くこと

が

自らを励まし

心を整理させる

負けない!!

どんな困難に直面しても

自らの足で立つ

それが

わたしの

しあわせ

【現代詩の勉強会】

*

去る四月三日(日)、あきた文学資料館において、「第十回 ピッタの会」を開催した。

司会進行は矢代レイ。内容は、「名詩を解体」。茨木のり子の「わたしが一番きれいだったとき」を教材とした。

参加者は十名。内、はじめての参加者は二名であつた。

*

「ピッタの会」もお陰さまで十回を数える。参加者の皆さまと一にして学べることは至極幸せなことであり、感謝を申しあげたい。

前号で、講師の皆さまは、へ教えることは自分の勉強になるから」と一様にご快諾してくださつた、と記した。

いざ発行本や参考資料を集めまとめていくうちに、編者(発行所)によつては現代仮名づかいでやる人もいて、送り仮名やルビが違っている箇所もあつた。年齢も、満年齢と数え年の表記の仕方で二、三の齟齬があり、整合性に欠けるところも見受けられた。

どっちが正しいのだろうか……？ 迷つた末、『現代詩人全集 第十巻 戦後Ⅱ』(角川文庫)に収録された初出の作品(詩集『見えない配達夫』一九五八年十一月一日発行より)を用いることにした。

講師の皆さまの、へ教えることは自分の勉強になるから」とおっしゃつた意味が、遅まきながら判つたような気がした。聞くと自分がやるのとで

は大きな違いがあることも――。

● アンケートより

*どんな会なのか、初めて参加させていただき、内容的に安らかな想いで素直に聞かせていただきました。詩の持っている心の広がり、深さについて学べる一つのきっかけになったように思えます。これからも参加させていただき、言葉と文に注意して、今後の日常生活に生かしていきたいと思っております。

● 講演内容

- ① 挨拶
- ② 自己紹介
- ③ 名詩の解体
- ④ 感想
- ⑤ 質疑応答

*茨木のり子さんの詩を取り上げて下さったことが、とても嬉しかったです。ひとつひとつ細かな手法を説明して、分かりやすかったです。とても充実した時間でした。

*矢代さんの詩の朗読、感動しました。参加してよかったです。とっても深い内容でした。

*詩の読み解きは、はじめです。とても内容が濃くて参考になりました。文章のなりたちをくずし読んでみると、こんなに時間がかかると驚きました。読むと5分ぐらいなのに！「わたし」というのが、とてもうれしいです。

*詩が生きる力になること、そこに詩の意味があること、納得しました。これからも良い詩をとりあげていただけるといい。矢代さんご自身の詩についても、説明を聞きたく思います。

*分解して説明したところは、簡単なレジメがあった方がよかったですのではないか。（見えないう、聞こえない場合）、その方が理解しやすい。

*一つの詩を家になぞらえて、屋根、壁、床、土台、柱等に仕分けし、三部に分けて、それぞれの時代の心境の変化等をひとつひとつ取り上げていき、作者の最も訴えたかったことをヒモ解く…なんて、とっても考えたことのない詩との私のつながり…。読み手がどうとらえるかなんて考えることなく、ただ今観たこと、感じたことを自分の言葉、そのままでしか綴ることしかできない私。残念だったのは、一ツ一ツていねいに説明して下さった言葉の意味…たとえば、倒置法という文字がよく見えない、分からない…ほとんどの語句が分からなかったことです。いつかじっくりお話できる場があったら、もう一度聴いてみたいです。私にとっては、本当の意味での「勉強会」だった。十回を重ねたというピツタの会。とても中身の濃い会だったと思います。



【お知らせ】

あきた文学資料館の都合により、六月からは日曜日の使用ができなくなりました。よって「ピッタの会」は今後、日曜日以外の開催となります。ご承知おきください。

【ご案内】

矢代レイ詩展 ― 詩と生きる ―

日時 7月1日(金) ～ 7月29日(金)

時間 9時～15時 無料

場所 秋田銀行本店 ロビー

秋田市山王3-2-1

なお、土曜日・日曜日・祭日はお休みです。
お問い合わせは、矢代レイまで。

☎ 090・1935・1180

【あとがき】

予想だにしないコロナ禍に攪乱されて二年が経った。私たちはコロナの、感染拡大という言葉に翻弄されつづけている。

そして、今度はロシアによるウクライナ侵攻が勃発した。平和の秩序を乱し、脅威を与える残忍な行為は許されるものではない。戦禍を逃げ惑う人々の姿、生々しい惨状は正視に耐えない。

様々な理由で、ヒトは戦争を起こす。目に見えないウイルスと違い、戦争終結の手立てを講じるのも知情意を備えたヒトである。一日も早い解決を祈ってやまない。

*

日当たりのいい斜面でフキノトウを見つけた。黄緑の衣が開くとき、本当の春がやってくる。この明るさを届けたい、厳しく冷たい地へ。

